

写真上段：第1回全国オールドボーイロードレース洞爺湖温泉大会(1975年6月)

下段：第50回ANA洞爺湖マラソン2024(2024年5月)



洞爺湖マラソン第50回記念特集

走者の軌跡



洞爺湖マラソンが、今年5月の大会で第50回の節目を迎えました。洞爺湖マラソンはなぜ始まり、どのように発展を遂げたのか。その軌跡を振り返ります。

1975年 第1回 OBレース



満面の笑みでゴールテープを切る第1回OBレースのランナー。ゴール地点は旧洞爺湖スポーツセンターに設置され、多くの観客や報道陣が詰めかけました

第2回OBレース



湖畔を舞台に 全国の走者集結



全

国各地から多くのランナーが集う洞爺湖マラソンには、前身となった大会があります。それが「全国オールドボーイロードレース」(以下OBレース)でした。

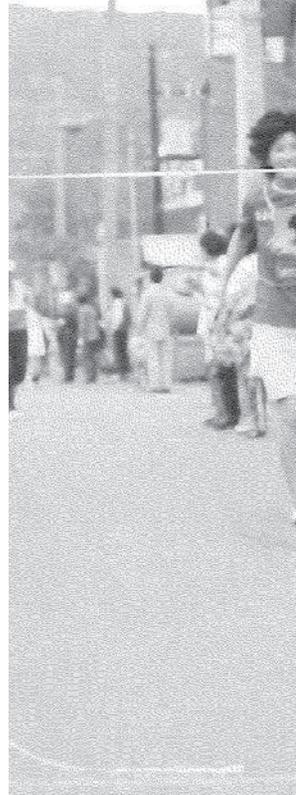
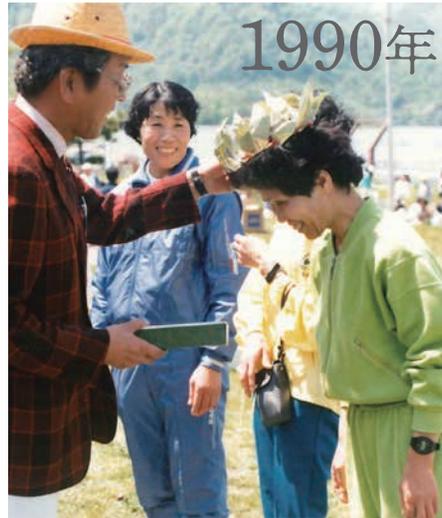
シニア層の健康増進などを目的とした「高齢者ロードレース大会」が開かれていた1970年代の北海道。よりマラソン熱を高めようと、主催者が新たな大会の開催を持ちかけたのが、旧虻田町の町長就任から間もなかった岡村正吉氏でした。

風光明媚な洞爺湖で鍛えた走力を発揮したい。そんな主催者側の願いをくみ取った岡村町長は開催を決定しました。記念すべき「第1回全国オールドボーイロードレース洞爺湖温泉大会」のスタートラインに立ったのは、北海道をはじめ南は佐賀県から集まった251人。晴天に恵まれた1975年6月8日午前11時。号砲が鳴り響くと同時に一斉に温泉街を駆け出しました。

最長のコースでも15キロにとどまり、あくまで高齢ランナーの健康づくりが大きな目的だった第1回



第15回記念OBレース



第30回記念洞爺湖マラソン 2004



「末永く育ててゆく」 OBレースは フルマラソンへ



大会ですが、ランナーの年齢制限が無いオープン部門を当初から設けていました。小学校入学前の子どももエントリーするなど幅広い年代を受け入れており、第2回大会のプログラムには、OBレースを「初夏の洞爺湖の名物行事として、末永く育ててゆく」とする岡村町長のあいさつ文が残されています。その狙いどおり出場者数は第4回大会で千人、第10回大会では3千人を突破します。

OBレースの開催を重ねる中、出場者の中からは、フルマラソンを望む声も上がり始めました。そして、1992年に行われた第18回大会から「洞爺湖ハーフマラソン」を同時開催。大会運営のノウハウも積み重なった1995年、ついにOBレースは「洞爺湖マラソン」に生まれ変わりました。

2度の有珠山噴火や、新型コロナウイルスの感染拡大など開催を阻む事態にも見舞われましたが、それでも歴史はつむがれ続けてきました。決して平坦ではなかった第50回の節目に至る道のりには、マラソンを愛するランナーによる無数の足跡が刻まれています。

走者のドラマはまちと共に わたしと洞爺湖マラソン



道内有数の大会に成長した洞爺湖マラソン。多くのランナーによって今に至る道のりが築かれてきましたが、その裏には大会を支え、盛り上げてきた町の人々の姿がありました。

走者を支える町の声

「当

時はいろんなことに一生懸命でした。旧虻田町職員として、第1回全国

オールドボーイロードレース洞爺湖温泉大会の開催に携わった、佐野正さん(73)は懐かしそうに語ります。全日本大学駅伝に出場した経験を買われ、準備に奔走。現在のような組織も無く、全てが手探りの中での大会でしたが、マラソン熱の高まりも受けて現場の気気は高く、「マラソンに対する関心の高さと『実現させよう』という気運が後押ししてくれました」と述懐します。町内のスポーツ関係者が少しでも大会を盛り上げようと仲間に熱心に声を掛け、ランナーを集めました。

青木佐智子さん(87)は、第1回大会のランナーの一人。もともと陸上競技に縁は無く、知人に誘われて出場しました。「走っているときは苦しくて『早く終わればいいの』と思ったものです」と振り返りますが、ゴールしてから感じたのは走る喜び。「終わってからは不思議と苦だとか嫌だとは

思いませんでした」と話す青木さん。現在は佐野さんと共に裏方として、ランナーを支えています。

同じく長年、大会を支える鈴木良彦さん(88)。日胆陸上競技協会(現・室蘭地方陸上競技協会)の一員として、洞爺湖マラソンを日本陸上競技連盟公認の大会とするためコース検定の準備などに尽力しました。「来てもらったランナーをどう温かく迎えるかが大切。市民マラソンなので地域の楽しさが感じられる大会になればと思っています」と振り返ります。

町と洞爺湖マラソン

大西智大会長は「すでに大会の基礎ができていたので何をプラスしていくかを考えることができました。計画を練ってきた歴代大会長のおかげです」と就任からの軌跡を見つめ返します。多くの熱意に支えられて半世紀近い歴史を築いた洞爺湖マラソン。継続のために「皆さんの協力と理解が一番です」と町の連帯を呼び掛けています。

想いはひとつ

大西 智 大会長



鈴木 良彦さん



佐野 正さん・青山 佐智子さん





走者の軌跡



町と走る走者の声

国

内のマラソン大会に100回以上出場した落合康介さん(51)に

とって洞爺湖マラソンの原点は第37回大会。当日朝になって崖崩れで土砂がコースに流入し、開催が危ぶまれました。それでも流入場所前の20^号地点で打ち切り地点を設けて続行。落合さんはその後出場を重ね、健康目的で始めたマラソンは今ではライフワークに。コロナ禍による規模縮小なども経験しましたが「洞爺湖マラソンが復活して走れることに感謝しています」と、アクシデントを乗り越えてきた裏方をたええます。

長年、大会の舞台となってきた洞爺湖温泉。洞爺観光ホテル社長で、とうや湖温泉旅館組合長の三浦和則さんも出場を続けるランナーの一人です。「町内では一番集客力があるイベントだと思えます。非常に大きな経済効果があります」と経営者としての大会を語る一方、スタッフへの感謝は絶えません。「壮瞥町や伊達市など近くのマチも含めた大勢の協力があ

ればこそ。コースの魅力だけでは続かなかったのではないのでしょうか」と話します。

洞爺湖温泉でハンバーガー店「ハイドウン」を営む伊比美香子さん(43)と佐藤つぐみさん(39)も洞爺湖マラソンに魅せられました。温泉に移住した2014年から出場した伊比さんが佐藤さんを誘い、2人で走り続けています。50回記念に合わせて初めてフル出場を決めた2人のスマートフォンには、一緒に走った仲間との写真が何枚も残っています。「ワクワクするのが走る理由。一緒に出た人と分かり合える感じがするんです」。第50回大会は洞爺湖温泉の友人も出場してくれ、地元「三友」の輪を広げています。

洞爺湖マラソンの発展

裏方として大会を支えてきた町の人々と、その支えを力にゴールを目指す町民ランナー。両者の存在は洞爺湖マラソンを発展させる推進力となって、大会を守り続けています。

走るために

伊比 美香子さん(左)・佐藤 つぐみさん(右)



三浦 和則さん



落合 康介さん





湖畔に刻んだ走歴 一歩ずつ先へ

走者集結！ 笑顔の記念大会

時

代と共に成長を続けた洞爺湖マラソンは5月19日、ついに大きな節目を迎えました。第50回記念ANA洞爺湖マラソン2024は全国から約5400人がエントリー。晴天にも恵まれ、熱いレースが繰り広げられました。

午前9時に始まったフルマラソンは、昨年より900人以上多い約4900人が出場しました。男子の総合優勝は札幌市の土橋晋也選手。歴代4位に食い込む2時間24分ジャストの好記録を残しました。女子の総合優勝は佐賀県から出場した吉富博子選手。歴代3位となる2時間43分08秒で、第39回大会以来2度目の栄冠を飾りました。

ゴールには到着を待つ家族や友人、そして無事完走したランナーが集まり、熱気に包まれていました。そこにあつたのは走る喜びに満ちた走者の笑顔。第1回大会から変わらない光景が、半世紀近くの時を隔てた今も広がっています。





姉妹都市・箱根町から参加しました！

今年7月で姉妹都市提携から60周年を迎える神奈川県箱根町から、12名が第50回大会に駆けつけてくれました！

当日は5^{キロ}マラソンに出場。沿道で見守る人々に手を振りながら無事に走り終え、大会を盛り上げてくれました。今後は記念式典なども予定されており、両町の交流がさらに深まります。



男子フルマラソン総合優勝
土橋 晋也さん(32)

「自分のペースで走れたのが結果につながったのかなと思います。暑い日でしたが湖沿いの木陰が日光を遮ってくれました。気候的にも出場しやすく、道民としてすごく良い大会だと思います」

走り終えてー

女子フルマラソン総合優勝
吉富 博子さん(40)

「この時期に出られる大会を探して出会ったのが洞爺湖マラソンです。山や湖がきれいで、あちこち見ながら走っていました。最後まで気持ちよく走ることができました。来年もまた出たいと思います」



歴史重ね 次の大会へ

湖

の景色を見ると力が出ます」「気候も良いから走りやすいです」。ゴールしたランナーに感想を尋ねると、よく似た答えが返ってきました。

女子5^{キロ}・70歳以上の部で2連覇した菊地早苗さん(74)「伊達市は「湖がきれいだし、沿道から声を掛けてくれたのがうれしかったです」と自然と人の支えに感謝します。男子10^{キロ}・39歳以下の部で1位の西沼佑司さん(36)「札幌市も「鳥の音が聞こえたり、走るには良い環境だと思います」とコースの美点を語ります。

自然の魅力にあふれたコース、温泉のぬくもり、町の人々の声援。洞爺湖マラソンの伝統は第50回大会でも多くのランナーの記憶に刻まれました。そしてもう一つ返ってきた共通の答えは「来年もまた出たいです」。歴史は次へとつながれ、洞爺湖は新たな号砲が鳴る日を待っています。

